

函館とイザベラ・バード（１）

大 野 純 子

はじめに

イザベラ・バードは1878（明治11）年5月20日に横浜上陸後、東京の英国領事館に滞在して旅の準備を進めた。総領事パークスは、バードが函館で領事ユースデンの元に泊まるように手配をしていた。

同年8月7日嵐の日の早朝、青森からの船をはしけに乗り換えたバードと従者イトーは函館東浜栈橋に着いた。旅客全員が税関の役人にさんざん待たされ、荷物の検査を受けて解放された。当時、開拓使は辺海防備のため、函館に出入りするすべての人間にこの検査を課していたのである。それから、バードはなぜか領事館より遠くにあるデニング邸に向かい、そこで旅装を解いた。

バードにとって、函館は東京からの長旅の疲れを癒やす場所になり、また彼女のアイヌ調査の拠点ともなった。本稿は主にバードが函館で最も接点を持った人、ウォルター・デニング（当時、英国聖公会宣教協会 CMS の宣教師）について述べる。バード著『日本奥地紀行』の引用にあたっては、金坂清則訳の完訳版1～4巻を用い、引用部分の巻数、ページは「完3－21」のように記した。原著は1880年ジョン・マレー社版の電子版を用いた。

1. バードが会った人—ウォルター・デニング

1.1 バードはなぜ領事館に泊まらず、デニング邸を選んだのか

バードはその著書『日本奥地紀行』で「なぜデニング邸を選んだのか」という問いに直接答えなくていいように、いくつかの言いわけをしてから、デ

ニング邸に行ったという事実だけ述べている。その言いわけとは、「当日、船は欠航していてもおかしくない状況だった」「そのためか棧橋に（領事館の人間の）迎えがなかった」「領事館で（バードを）迎える準備をちゃんとしていたことを知らなかった」「デニングとは東京築地居留地の CMS で一度会っており、招待の言葉をもらっていた」というものである。

なぜデニング邸を選んだのか、バードは誰も傷つけないように書いているが、その理由はまず第一に、平取アイヌのリーダー「ペンリウク」の家に泊まり込んだことがあるデニングから、より詳しい情報を得たかったからだ。（築地では、新潟から来た宣教師ファイソン夫妻もいたことだし、それほど時間はなかったと思われる。）デニング邸に泊まれば、彼の都合のつく時に話ができる。たとえば、バードは平取から函館に戻った後も、収集したアイヌ語の音表記についてデニングに確かめることができた。

第二には、バードが日本の宣教についてあらためて興味を抱き、英国の読者に CMS が日本で最も力を入れている函館の宣教状況を伝えようとしたためである。バードは新潟で初めてファイソンが進める宣教の様子をつぶさに観察した。函館はすでにいくつかの宣教団体が活発に活動を始めており、他教派に直接取材はできなくてもデニングに頼り、全体の状況をつかむこともできる。そのためにはやはり領事館よりデニング邸に世話になったほうがよい。

第三の理由は、バードが領事館の事情を考えたからだ。バード来函当時の英国領事館は当時の松蔭町 3 番地に置かれた仮領事館だった。1865（文治 2）年に初代領事館が自火により焼失して以来、十数年の仮住まいである。この仮領事館は 160 坪の土地にある中古の建物 40 坪を転用し、多少の増築を行ったもので、敷地だけで見ても、後述するデニング邸（宣教師館）の敷地 656 坪とは比較にならない。ただし、ユースデンの私宅は別にあった。なぜなら 1879（明治 12）年 12 月 6 日に「英領事館及領事私宅（『函館大火史』p.236）」が焼失したという記録があるからだ。道路を挟んだ向かい側（当時の松蔭町 1 番地）には、すでに英国が借地として契約している 1700 坪という広い土地があり、領事館は日本政府が建てることになっていたが、なぜかその話は遅々として進まずにいた。ユースデン私宅がその広大な土地にあった可能性もあるが、いずれにしても仮住まいである。

当時、夏の函館は西洋人が避暑のために多く訪れるところだった。人が集まれば事件も起こりやすく、また、領事館、軍艦等での会食も頻繁で領事館の宿泊客も少なからずいる。ユースデンの夏の忙しさは聞くまでもなく想像できることであった。そして、バードも初対面の客とのディナーに引っ張り出されて、これまでの旅の話を所望されるのは迷惑だったろう。

第四の理由は、うがちすぎの面があるかもしれないが、ヘボン夫妻がこの夏、領事館に滞在することがわかっていたので遠慮した可能性である。領事館を避けた理由はすでに述べたように「狭いから」ということも当然あるが、バードの心中を推し計ると、もう一つの理由があったとしてもおかしくない。

旅に出る前にバードの旅行計画に一番反対を示したのがヘボンであった。バードは、ヘボンは「この旅は行すべきではない（完 1-85）」と述べ、（北海道はおろか）津軽海峡にもたどり着けないだろうとバードに言った。確かに旅程の道筋さえ明確でない部分がかなりあった。それを知ってパークスが「その方がかえって面白いじゃありませんか（完 1-87）」と言ったのとは対照的である。

ヘボンは滞日経験も長く、多くの西洋人の面倒を見てきた。宣教医として長年、日本人に医療を施し、そのために多額の私有財産をつぎ込んだ。また、聖書翻訳、辞書作成等の文化的な業績でも、人々の尊敬を受けている。多忙であるにもかかわらず、ヘボンはバードの従者の面接に付き合ってくれた。バードはもちろん彼に十分な敬意を払っている。しかし、長老派の重鎮であったヘボンが、この時代ということを差し引いても多分に家父長的な考えの持ち主であり、来日した女性宣教師の行動を見て「やはり女性は劣っている」との念を強くしていたこと、そして彼の妻が夫の考えに完全に追随していること¹⁾は自然に感じていたことだろう。バードに「ヘボンは自分のような女性を過去に知らないし、理解もしない」という思いがわき、多少敬遠する気持ちが生まれても不思議ではない。

バードが6月上旬に横浜でヘボンに世話になった時、夫妻が8月の函館行きをすでに決めていれば、自分たちも夏はそこに滞在すると話すのが自然である。1874（明治7）年に開かれた東京・函館・小樽間の定期連絡船は、当初一か月に一回の航行スケジュールだった（元木 1972 p.53）。一方、バー

ドは(1878 [明治 11] 年)、東京と函館の間に十日に一度、船が運航されていると書いている。数年で増便されたのかもしれないし、夏季は特別であった可能性もあるが、いずれにしろ、思い立ったらいつでも船に乗れるというほど頻繁ではない。加えて、ヘボンもその妻も留守中の仕事の調整をしなくてはならないから、6月上旬にバードと会った時点で、すでに函館行きを決めていた可能性が高い。ヘボンは函館滞在中にアメリカの弟スレーターに8月21日付で手紙を出し、旧友ユースデンに函館に来るように懇切な招待を受け、自分の健康のために妻とともに来たこと、五日前に当地に着いたことを知らせ、一か月ここに滞在して9月中旬に横浜に戻る予定だとも書いている(高谷 1976 p.134)。

1.2 デニングと関係する建物

バードは東京の英国領事館を出て新潟のファイソン宅に着くまで、そしてそこから函館のデニング邸に着くまでの長い旅程で、障子と襖しか隔てのない旅館の部屋と野次馬に悩まされてきた。函館に来て、久しぶりに鍵のかかる部屋で、担架式ではない普通のベッドに寝られる幸せをバードは綴っている。旅の大きな目的の一つである平取のアイヌ調査の前に同国人の家で西洋式の生活をし、英気を養うことができたのは幸いだった。

バードは「函館がとても楽しいということもあって、旅行計画をすべて立て準備も整えてしまったのに、出発を一日延ばしにしている(完 1-39)」と書いている。小川淳²⁾の息女は、かつて見聞きしたデニングの生活ぶりを「純英国式を守り、特に食事に関しては日本風の食事はとらなかった」(布施他 1959 p.416)と回想している。バードにとっては有り難いことだった。デニングが当時、関係していた建物は多いが、ここではバードが函館の宿にしたデニング邸と、宣教の中心となる礼拝堂について述べる。

1.2.1 デニング邸(宣教師館)

デニング邸は宣教師館でもあった。『函館市史 資料編』第一巻に1874(明治 7)年6月20日付で、函館支庁とデニングが交わした地所貸渡証書が掲載されている(p.924)。借地契約をした土地は坂町 83、84、85 番地(現

弥生町 8) である³⁾。

証書は 3 部作成し、支庁とデニング、ユースデンがそれぞれ一通ずつ保管すると記してある。この証書の内容から、函館支庁がユースデンを信頼していることが読み取れる。ユースデンは赴任期間がただ長いだけでなく、函館の発展のためにも尽くしてきたことを支庁はよく心得ていた。

箱館奉行時代から、役所は外国人との借地契約に神経を尖らせていた。契約者である外国人本人が退去する時に、他国の外国人に勝手に又貸しするなどのめめ事があったからだ。また、宗教施設建設の目的で土地を貸す場合、そこに墓地を作ってよいかどうかは明記しておく必要がある。支庁はたとえばロシアのハリストス正教会の司祭に土地を貸す時は、明確にそれを禁じている。ところが、デニングのこの契約書には何も言及がなく、他の注意事項についても非常にあっさりしている⁴⁾。

このようにして借りた土地にデニング邸（宣教師館）が建った。建坪は不明だが、土地は先に述べたように約 656 坪ある。土地はほぼ長方形で、函館西部地区のほとんどの土地がそうであるように坂の途上にある。この土地から函館山に向かって左側の坂（仮に A 坂としておく）は現在は痕跡もなく、民家が並んでいる。西部地区の坂は、海からまっすぐ坂上の住宅地最奥まで一本の道を通すように、大火のたびに改善されてきたためだ。現在、A 坂に一番近いのは「姿見坂」である。山に向かって右の坂（仮に B 坂とする）は現在の「幸坂」とほぼ重なっている。デニング邸の敷地は B 坂に直接接していたわけではなく、間に借家があった。現在の弥生町 8 番の地図から推測するとデニング邸敷地から小道があり、この坂に直接出られたようだ。

デニング邸の鮮明な写真は残っていないが、山から見下ろした街並みの写真に建物が辛うじて写っている（はこだて外国人居留地研究会 2015 p.45）。白い壁の二階建ての洋館である。その玄関は常識的には A 坂に向かって置かれそうだが、はこだて外国人居留地研究会会員 佐藤稔氏によれば、正面玄関は A・B 坂を結ぶ横道「C 通り」に向かって設けられていたようだとのことである。その理由は現段階で明確ではない。現在の姿見坂、幸坂から推測すると、A、B どちらの坂も急坂である。A 坂に向かって門を作ると、東浜棧橋に人を迎えに行くときなど、海側に下るときは気分的に楽だが、

雪道の時、または騎馬で出かける時は負担になる。

西部地区全般に言えることだが、坂道が急坂でも、横道(坂と坂をつなぐ道)は平坦で行き来が楽である。馬に乗る西洋人にとっては、馬に負担がかからない。デニングが英国領事館、または開拓使函館支庁に行くときは、玄関を出てC通りを左に行き、平らな道をまっすぐ進めば、目的地にかなり近いところまで着く。また、C通りを右に進めば、外国人墓地に比較的近い。日用品は出入りの商人が届けてくれるだろうし、もとよりデニングの仕事ではない。本国にいたときのように友人や信者を訪ねることもほとんどない。すると、少なくとも彼にとってはそれほど不便ではなかったと思える。

当時は江戸時代からの慣習で、家の間口の幅で町費や税金を決定していたので、西部地区の敷地はその節約のためにウナギの寝床のような形で密集して並んでいた。デニング邸のように、門を作る位置を選べることは、よほどの大家、または公共の建物でなければなかった。函館は大火で町ごと焼き尽くされることがたびたびあったので、当然、新築の家も多く、このようなことを新たに考慮する機会が他の地域より多かったのである。

1.2.2 宣教師館とは

1874(明治7)年の来函時、デニングは妻、三歳とゼロ歳の乳幼児の四人家族だった。このような家族に数百坪の家は大きすぎるだろうが、宣教師館というのは公的な部分が多い。

当時の宣教師館の内部にどんな場所が必要かという、客間、事務室、広い厨房と食堂、客用の寝室(出来れば複数)、浴室・トイレ、洗面所である。近くに礼拝堂がない場合は、ここで礼拝が出来るように、集会室もあったほうがよい。以上がパブリックゾーンで、宣教師家族の寝室、居間、浴室・トイレ、洗面所、使用人たちの部屋はプライベートゾーンである。

使用人は宣教師館が大きければ一人や二人では済まない。ヴィクトリア朝時代のミドルクラス以上の家であれば、コックは必ずいる。ユースデン領事は函館に赴任した時に、横浜から洋食が作れる中国人コックをちゃんと連れて来ている。子どもが小さい場合は乳母、そして家事、客の応対をするメイドも二人程度は必要だった。1875(明治8)年に函館の英国領事館構内の

厩から出火し、日本人馬丁が焼死する事件があった。交通の便のよい東京中心部などを除いた場所では、ちょっとした西洋人の家なら馬と馬丁を専属で置いていた。外国人襲撃事件の心配がほぼなくなった明治 10 年代から、大都市ではだんだん馬と馬丁より専任の人力車夫を置くほうが経済的で好まれるようになった。しかし、函館西部地区は坂道が多いので人力車は使いにくかった。馬丁にしても車夫にしても、彼らは庭仕事、力仕事、買い物も担当した。そのようなわけで、使用人は絞っても 5 人程度の人員になる。

しかし、これは宣教師の理想に近い住居を述べたもので、それとはほど遠い環境で苦勞する宣教師夫妻も多かった。たとえば、1873（明治 6）年に東京で CMS 日本宣教總書記に任じられたパイパーとその夫人が住んだ東京の最初の家は「床と壁だけ」の部屋が四つ並ぶ奇妙な造りで、台所もないため、夫人は 2 年半にわたり窓も煙突もない所で炭火の煙を充満させ調理した。それを考えると、デニング邸は理想的だった。

デニングはあらゆる機会をとらえて心理学、教育、哲学などの宗教以外の講演もこなし、いくつもの説教所を設け、人を集めた。次に述べる礼拝堂では、英語の礼拝と内容の解説も行い、英語に興味がある人の関心を引く工夫をした。かと思うとプライドにこだわらず、路傍伝道までして、積極的に信者を獲得している。

1. 2. 3 礼拝堂

ちょうどバード来函の年、大通り（現・電車通り）の末広町電停あたり、当時の内濶町 3 番地に、「礼拝堂」が設けられた。デニングはもともとこの借家で毎週日曜に説教をしていた。前述佐藤氏によると、この敷地の町名番地は「内濶町 3 番地」から「元町 55 番地」、そして「末広町 20 番地」に変わっているとのことである。大通りの山側にあたり、現在は商店がある。バードは平取に発つ前にこの礼拝堂を訪れて、中の様子を描写している。ところが、その描写内容が奇妙で、金坂も「一抹の不明確さがある」（完 3－251）と述べている。バードによると、この建物は通りに面して部屋と土間があり、裏はずっと台所になっている。当時は礼拝の後、軽食を出すこともあったようで、それを目当てに来る人も当然いた。だから台所があってもよ

いが、ずいぶん大きそうなところが妙だ。

彼女が訪れた時は、多くの人が集まっていた、警官も外で巡回していた。礼拝堂内部に二階に通じる階段があったというから、少なくとも二階はあるのだろうが、そこは何になっていたのか、記述はない。最も違和感があるのが、祭壇についてバードが何も述べていないことだ。バードの書きぶりは、町の集会所でも見に行ったかのように事務的である。外観は、『函館聖ヨハネ教会沿革史』によれば、「堅牢な木材で土壁、漆喰瓦屋根、鉄の留金付 (p.4)」とある。

その後、デニングが 1878 (明治 11) 年 11 月 24 日付『函館新聞』に出した広告によると、「来たる 24 日、内濶町礼拝堂開式を行う (現代日本語に改変 大野)」とある。後日、小川淳が『七一雑報』1878 年 12 月 20 号に寄せた報告によれば、開式当日、午前の部に 120 名、夜の部に 350 名超の来会者があった。

バードが「敷地を表通りに購入⁵⁾できたことは、キリスト教が容認されたことの証である (完 3 - 194)」と記したこの礼拝堂であるが、バード来訪のわずか一年数か月後、1879 (明治 12) 年 12 月の大火 (1.1 であげたもの) でデニング邸、英国領事館、ユースデン私邸とともに全焼した。デニングの落胆は言うまでもないが、彼は大火後の人々に魂の安らぎを与えようと路傍伝道をするなどして新たな信者を作ろうとした。そして一年もたたないうちに英国の知人から、礼拝堂の資金援助の約束を取り付け、礼拝堂再建を果たすことができた。

1.3 デニング周辺の不和と不適応

函館時代のデニングは頑固で議論好きと評されており、周辺の何人かとの不和が表面化していた。CMS 日本宣教の最高責任者ワレンは、1882 (明治 15) 年の英国本部委員会宛て年次報告書で、デニングについて「この国におけるもっとも活動的な宣教師の一人 (名取 2011 p.19)」と認める一方で、彼の自己評価は度が過ぎているとも述べている。

1.3.1 二川一騰

デニングが函館で最初に経験した不和は、長崎から共に来た信者二川一騰

の出奔である。彼はデニング自身が育てた弟子ではなかった。二川は元は福岡の寺の子息で、攘夷思想を持っていた。西洋人の内情を知るために長崎でデニングの前任者エンソウに近づいたが、だんだん感化され、ついには受洗して熱心に宣教の手伝いをしていた。当時禁令のキリスト教信者になったことで投獄されても棄教しなかった。エンソウが病気のため帰英することになったので、彼は後任のデニングに日本語を教え、来函当初はデニングの手足となって働いた。

二川は来函翌年の春、デニングと意見が合わず、去った。彼は相手がデニングであろうとなかろうと、このようなことを繰り返す人物だった。これ以降、彼はキリスト教の他教派に行き、衝突してはやめ、次の新しい教派に入るということを何回も繰り返した。

1.3.2 J・ウィリアムズ

バードの函館滞在時の記述を読むと、函館にいたCMSの牧師はデニング一人であった印象を受けるが、実はそうではない。J・ウィリアムズという牧師がいたし、学生宣教師として、バチェラーもいた。この二人が『日本奥地紀行』に登場しないのは、そこにデニングの意思が働いたためか、バードが状況を読み取って二人のことに触れずにいたのかわからない。バードが函館で二人に一度も出会わなかったということは考えられない。

ウィリアムズは夫婦で1876（明治9）年8月に来函した。彼はデニングより一歳年下であった。『日本聖公会百年史』には、「ウィリアムズ夫妻が函館に来任したことはデニング師にとって大きな援軍であった（p.77）」とある。CMSは、デニングが来函後、信者を増やしたのを見て北海道宣教の可能性を知り、人員を増やしたのだった。夫妻はデニング邸とは別の家に住んだ。（住居のみでなく、教室もあったようだ。）その後、バチェラーが香港から病気治療のために来函し、ここに同居した。

確かにデニングはウィリアムズが来たおかげで、1877（明治10）年2月から翌年4月まで休暇をとり、帰英することができた。しかし、ウィリアムズが函館にいた3年弱は、争いの日々だった。デニングは、上から一律にキリスト教を説くだけでは、士族などのすでに教養がある人の心をつかむ

ことはできないと考えていたので、ウィリアムズを「日本人の改宗者の視点に欠けている」と批難し、帰英中も彼の礼拝堂建築監督の不備をたびたび咎めた。建築に際しては本部委員会から多額の資金を提供されているので、ウィリアムズは本部からも無能を責められている。

彼はデニングとの不和に耐えられず、東京転任を強く願って1879（明治12）年5月に何とかそれを実現させたが、上司ビカステス主教の本部宛の手紙には「（ウィリアムズは）東京での仕事には、全宣教師中もっともふさわしくない人物（名取2011 p.49）」とあり、ありがたくないお墨付きをもらっている。一方、ウィリアムズは本部への報告で「デニング師が言い争いをしなかった人はほとんどいない（ボールハチェット1987 p.24）」と反撃している。

このように、函館の小さな西洋人社会は摩擦の多いものだった。幕末から長く函館に住む英国商人ブラキストンは、この地に少々立ち寄ったに過ぎないバードが、「（彼らは）お互いに反目し、あまりつきあいがいい」と安易に著書に書いたことに立腹している。しかし、彼も珍しくバードと同じことを、もっとあけすけに「犬や猫のようにお互いを敵視して、猫は猫でかたまり、犬は犬で集まって暮らしている（ブラキストン1979 p.59）」と述べている。ブラキストン自身も、函館の西洋人社会の雰囲気悪くするのににおおいに活躍していた。

1.3.3 妻ヴィクトリア

バードはヴィクトリアに築地で一度会っている。その時はデニング、ユースデン夫妻と共に会ったので、彼女の印象が書いていないのはいいとして、バードは函館で平取への行き帰り、デニング邸に何泊もしながら、ホステスであった彼女について一言も触れていない。（バードは新潟で世話になったファイソン夫人については、日本語の会話を難なくこなし、近隣の日本人女性たちと親しく交際し、バイブルクラスも持っていると述べている。）

ヴィクトリアはデニングより9歳年上で、32歳の時にデニングと結婚した。年齢から察してそれなりの覚悟を持ち、辺境に赴く宣教師の妻になっただけだ。しかし、彼女はユースデン夫人と比べても影が薄く、写真もエビ

ソードも残っていない。宣教師の妻として宣教本部に期待される義務を果たす以前に、とにかく異国での生活が辛かったのだろう。彼女は来函一年半後の1875（明治8）年秋には、病氣療養のため子ども二人を連れ、乳母を上海まで同伴させて一時帰国もしたようだ。デニングは札幌や函館近郊、またはアイヌ居住地平取へも積極的に出向いていた。札幌にはたまに妻子も同行したようだが、基本的には一人だった。彼女は強風の吹く土地で火事の心配をしながら、乳幼児と言葉のろくに通じない使用人たちだけで過ごした辛い夜がかなりあっただろう。

当時の海外赴任の宣教師の妻というのは確かに試練が多い立場だった。アメリカの例だが、各宣教団体の機関誌に宣教師の妻の名前が二度目に載るときは、その死亡を伝えることがほとんどであったという。（一度目は夫の赴任時、あるいは結婚時。）

宣教師は最初の海外赴任直前に急いで結婚することが多かった。それは本部が、可能なら妻帯して赴任することを望んだからである。デニングは1870年1月に英国で結婚し、同年最初の赴任地マダガスカルに着任している。ヴィクトリアは六人子供を産み、うち二人（双生児）は死産・早世し、函館に墓がある。最初の二人はマダガスカルに墓があるか、もしくは航行途上で水葬したと思われる。

宣教師夫妻は20代で海外初赴任する人が多かったので、赴任の時点で妻が妊娠中であることも多かった。ヘボン夫人もかつて妊娠中の身で、夫とともにアメリカから中国へ三か月の船旅をし、死産した。他には船中で死産し、自らも死亡した妻もいた。この時代、女性はもともと妊娠出産のリスクが大きかったが、それに加えて彼女たちには外国生活のストレスと赴任旅行の負担が大きかった。

妊娠・出産以外の病氣も多く、CMSの宣教師の妻では、前述のパイパーが夫人の体調悪化のため、夫婦で完全に離日した。ウィリアムズの妻メアリーも、東京に転居した後に病氣になり、夫婦共に一年以上帰国した。男性が来日して健康を害して帰国することもあったが、割合からすると、その妻のほうが圧倒的に多かった。

しかし、宣教師の妻だけが苦しいわけではなかった。当時の函館の西洋人

社会だけを考えてみても、前述のブラキストンの妻は来日して数か月後、単調な生活に耐えきれず、故国に帰ってしまった。ロシア領事ゴシケヴィッチの妻は、あまりに日本の生活が合わないの、領事が帰国を考えるほどだった。

ヴィクトリアの存在の形跡を一つだけ認めることができた。前述の礼拝堂開式の広告である。開式の時刻を述べた後に「翌日 25 日から内濶町 3 番地で英語学、裁縫術⁶⁾教授します」(現代日本語に改変 大野)とあり、最後に「ウキクトリア デニング」「ミツス コラツス」「メレイ ウキリアムス」とある。二番目の女性は特定できない⁷⁾。最後の女性はウィリアムズの妻メアリーである。ただ、ヴィクトリアが名目だけでなく本当に活動したのかどうかは断定できない。

1.4 デニングの変質と後半生

幕末の箱館で、ハリストス正教会の司祭ニコライは、ライバルであるカトリック神父の宣教の様子をこのように書き残している。「私(ニコライ)と知り合いになることを極力避けている」「常に二人一緒に」「僧服を着て、人の機嫌をとるような、もの静かな足どりで歩く」「顔にはもったいぶった表情を浮かべ、何かあればいつでも天を仰ぐふうである(中村 1996 p.57)」。ニコライの観察から見ると、このカトリックの宣教師は自分の主張は日本語で言えても、質問に答えたり、相手を納得させるほどの日本語能力はなかったのだろう。当時、キリスト教はまだ禁制だったので、日本人との接点は簡単には持ちにくかった。デニングは高札撤廃後の来日なので事情は異なるが、彼は宣教師の型にはまることなく、日本語を自在に操り、日本人に議論を挑まれるのをむしろ好んだ。

彼は当初、ほとんどの宣教師と同様に、いわゆる下層階級の人々への宣教を考えていた。ところが、実際に宣教を開始してみると、集まってきたのは下級藩士の家柄で、一定以上の日本的な教養をすでに身につけている者が多かった。15 年前なら攘夷思想は主に彼らの中で育まれていたはずだ。彼らが持ちかけてくる議論に応じてきたことが、やがて彼自身の変質につながっていった。

1.4.1 札幌バンドの影響と解任

デニングを変質させた最大の原因は札幌バンドにある。「バンド」とは、ここでは明治時代にキリスト教を新しく知った青年たちの集団を指す。彼らは家の宗教を捨て、そこから生じるさまざまなトラブルを承知の上で苦しみと闘い、受洗を選択した。これはデニングも経験していないことである。当時の日本の知識人はダーウィニズムと、西洋の技術、キリスト教を同時に知り、最初からキリスト教に対する懐疑があった。英国においても、ダーウィニズムと聖書の有効性の両立について議論があったが、多くの海外在住宣教師は、そのことについてあまり考える必要がなかった。

デニングは日本人が既に持っている伝統を利用してキリスト教の精神を普及させたらどうかと考えたり、異教徒の靈魂も救われる可能性があると言い出し、本部にもそれをうったえ、函館や札幌で講演をした。後者の「条件付靈魂不滅説」はデニング独自の考え方ではなく、当時の英国社会でダーウィニズムとあいまって生まれた論説である。それはキリスト教文明の絶対的優位性を捨てる方向にあり、CMS本部から見れば危険な考えであった。当時の西洋社会は芸術としてのシノワズリー、ジャポニスムは認めていたが、思想にまで東洋的なものが流入することは断固、忌避した。

デニングはCMS本部に呼び戻され、1883(明治16)年1月に解任された。彼はその決定を受けざるを得なかったが、宣教師であることをやめるつもりはなく、そのまま英国で「日本特別伝道会」を結成し、講演などを通じてたちまちのうちに資金を集めて日本に舞い戻った。デニングの実力を知るウィリアムズが、東京でいかに懸念を持ったか想像に難くない。

1.4.2 ジャーナリスト、教師として

デニングの解任は英国でも大きく取りあげられた。バードはどう感じただろうか。彼女は異国の宣教団のさまざまなトラブルの例も知っていたが、「なぜあの熱心なデニングが」という思いにとらわれ、思考はそこで止まっていただろう。バードの著書で描かれたデニングの姿は、困難に立ち向かう宣教師の理想の一例を示していた。英国の読者は、傑出した宣教師によって多くの魂が救われることを願い、献金をしていたのである。

デニングは約一年半で特別伝道をやめたが、その間、函館の信者の面倒を最後まで見て、戻りたい人は聖公会に戻れるように努力した。彼は東京に住み、各種英字新聞、雑誌への寄稿と講演活動を盛んに行った。福澤諭吉、森有礼らと交友を持ち、慶應義塾で英語を教えたり、文部省で英語の教科書の編纂に関わったりもした。

1889（明治22）年にヴィクトリアは病死した。デニングはその後リディア・ノルマンと再婚⁸⁾し、1892（明治25）年からオーストラリアに住んだが、1895（明治28）年に再び日本に戻り、仙台の第二高等学校で英語科教師⁹⁾として18年間務め、1913（大正2）年、在職中にリウマチによる心臓麻痺のため67歳で病死した。遺体は遺言により火葬され、二高が追悼式を行い、多くの人が参列した。

デニングは学生には「ユーモアのある、教育熱心な先生」と見られていた。彼は教材や教授法に常に工夫を凝らす教師だった。職務に励み、二高から多額の特別手当をもらったこともある。また、長年日本の教育に貢献したことで二回の受勲歴がある。

デニングの著書、寄稿記事、講演記録は多数に及ぶ。扱うテーマが函館時代より格段に広がったのは、立場が変わったので当然であり、彼にとってもやりがいがあったと思われる。それらのタイトルを見ると、だんだん彼が自分自身のテーマを見つけていったことがわかる。それは豊臣秀吉を例にとった英雄論である。最初は授業のために「日本人も知っている話を英語の教材として取りあげる」という意図で始めたことだが、創意工夫の才があるデニングである。豊臣秀吉を西洋の英雄論で分析し、独自の論考を練っていった。

彼は宣教師として約15年、教師・著作家として約30年を過ごした。バードには理解できなかったかもしれないが、デニングは宣教という枠から解放され、結果としては彼自身の持つ才能を充分活かしきることができた。

謝辞 はこだて外国人居留地研究会会員の皆様には直接、あるいは著作物を通じて多くのご教示をいただきました。ここに記して感謝申し上げます。

註

- 1) ヘボン夫妻が独身女性宣教師全般をどうとらえ、彼女たちの行動のどこに不満があったかは、小檜山（1992）に例があげられている。
- 2) 会津藩士。父と二人の兄を会津戦争で失う。函館に出て修学中、デニングに日本語を教えるようになり、その後受洗。後に司祭となった。
- 3) 当時の函館西部地区は小さな町が複雑に入り組み、番地も飛び飛びであった。借地契約したこの土地にはかつて官営の「箱館医学所」があった。本文にあげた地所貸渡証書、またデニングが作成した宣教のための宣伝文「真神十誠」に記載された住所などから、坂町 83 ～ 85 番地であることは間違いない。
- 4) ただし、支庁は敷地の溝の造成費用負担には気がつかなかつらしく、半年後に追加の約定証を出している。
- 5) 実際は借地。
- 6) 英語学ではなく、英語を教えたのだろう。その他に宣教師夫人たちが教えるものは編み物など。
- 7) フルネームではなく、「ミス 何々」という呼び方は修道女、または女性宣教師であることを表す。1878（明治 11）年当時、メソジスト監督派教会のメアリー・プリーストという女性宣教師が函館にいた。また、カトリックの修道女三人が同年 5 月に来函し、同様に裁縫などを教えており、『函館新聞』1878（明治 11）年 8 月 14 日付の記事には礼拝堂が立つ予定であることと、この修道女が教えていることについてまとめて一つにしているものがある。当時、CMS にはまだ女性宣教師は存在しなかった。バードはこの修道女について言及している。（完 3-32）。教派同士の関係から見れば、メソジストのほうが可能性があるが、いずれにしる「コラツス」と表記できそうな名前の女性はいない。当時の函館で、このようなことができる西洋人女性は非常に限られているため、このどちらかの可能性はあるとしておく。
- 8) 息子二人のうち、弟のエスラーは後に駐日英国大使（在任 1952 ～ 57 年）となった。
- 9) 元長老派宣教師 C・カロザースも同年、二高の英語教師になったが、翌 1896（明治 29）年、「ご真影」に敬礼をしなかったと不敬事件で解任さ

れた。デニングとは半年ほど勤務期間が重なっている。カロザースは後年「ユニテリアンあるいはユニヴァーサリスト的な信仰を抱くようになった(小檜山 1992 p.312)」というが、もし、デニングがそのきっかけを作ったのなら興味深い。

参考文献

会田倉吉 1954「デニング英大使の父と福澤先生」『新文明』4巻1号 新文明社

——— 1954「再び W・デニング英大使について」『新文明』4巻8号 新文明社(大野注:タイトルに混乱あり。)

大西晴樹 2014『ヘボンさんと日本の開化』NHK出版

大濱徹也 1979『明治キリスト教会史の研究』吉川弘文館

開拓使札幌本庁庶務局外事課 1875『各国領事并公使贈答 明治八年自五月』(北海道立文書館蔵, 簿書件名簿 87)

金坂清則 2014『イザベラ・バードと日本の旅』平凡社

小檜山ルイ 1992『アメリカ婦人宣教師 来日の背景とその影響』東京大学出版会

五稜郭タワー 2014『函館の建物と街並みの変遷 都市再生のヒストリー』五稜郭タワー

齋藤元子 2009『女性宣教師の日本探訪記 明治期における米国メソジスト教会の海外伝道』日本ウェスレー協会

高谷道男 1976『ヘボンの手紙』有隣堂

富田章 1998『箱館から函館へ 函館古地図再現』函館文化会

中村健之助 1996『宣教師ニコライと明治日本』岩波書店

名取多嘉雄 2011『明治期における日本聖公会の千葉宣教』三恵社

西口忠 2016「イザベラ・バード著・金坂清則訳注『完訳 日本奥地紀行』を読むーイザベラ・バードが見た日本におけるキリスト教伝道ー」『関西英学史研究』9号 日本英学史学会関西支部

日本聖公会北海道教区歴史編纂委員会 1966『教区九十年史 日本聖公会北海道教区』日本聖公会北海道教区

- 根本直樹 1989「明治期の函館における都市形成」『地域史研究 はこだて』
第9号 函館市編さん室
- はこだて外国人居留地研究会 2010「はこだて外国人居留地 イギリス編」
はこだて外国人居留地研究会
- はこだて外国人居留地研究会 2015『150枚の画像が語る幕末・明治の国
際都市ハコダテ』新函館ライブラリ
- 函館市史編さん室編 1974『函館市史 資料編』第一巻 函館市
_____ 1995『函館むかし百話 あなたの知らない街の秘話
集』幻洋社
- 函館消防本部編纂 1937『函館大火史』函館消防本部
- 函館聖ヨハネ教会 1983『函館聖ヨハネ教会沿革史 前編』函館聖ヨハネ
教会
- バード、イザベラ 2012～2013『完訳 日本奥地紀行』1～4 金坂清
則訳 平凡社
- 布施明子・上條あい 1959「W・デニング」『近代文学研究叢書』第14巻
昭和女子大学近代文学研究室
- ブラキストン、トーマス・W [1883] 1979『蝦夷地の中の日本』高倉新
一郎校訂 近藤唯一訳 八木書店
- ボールハチェット、ヘレン 1987「ウォルター・デニング 明治初期に
おける宣教師の活動」『国際基督教大学学報Ⅲ—A アジア文化研究』
16 国際基督教大学
- 村元直人 1994『蝦夷地の外人ナチュラリストたち』幻洋社
- 茂木治 2010『資料 函館西部地区Ⅱ 山側部』出版社記載なし
- 元木省吾 1972『函館の履歴書』（非売品）
- 元木省吾 1987『新編＝函館町物語』玄洋社

『英語青年』1913（大正2）年 30巻7号 422号 英語青年社
『七一雑報』3巻51号 [1878] 1988 明治11年12月20日 不二出版
『七一雑報』7巻25号 [1882] 1988 明治15年6月23日 不二出版
『函館新聞』1878（明治11）年8月14日、同年11月24日

- Bird, Isabella L. 1880 "Unbeaten Tracks in Japan: An Account of Travels in the Interior Including Visits to the Aborigines of Yezo and the Shrines of Nikkô and Isé" vol.1,2 John Murray, London
- THE PEERAGE Person Page- 58233 <http://www.thepeerage.com/p58233.htm#i582326> (2017 年 09 月 20 日閲覧)
- The Dening Family Tree http://rcdening.co.uk/life/family_tree.htm (2017 年 09 月 20 日閲覧)